

78th Kanto University League 2004

リーグ戦を振り返る

史上5校目となる関東大学サッカーリーグ3連覇を目指した駒大。開幕戦では2部から昇格の流経大にまさかの敗戦。前半戦は下位チーム相手には大勝するものの、上位校との競り合いに負けてしまい3位で折り返す。

夏、大臣杯を史上初の3連覇で締めくくり、勢いそのままにリーグも3連覇と行くと思われたが、後期歯車が崩れてしまう。「勝負に勝って、ゲームに負けた感じ…」筑波大戦後の秋田監督の言葉が印象的だった。そんな今期の駒大サッカーを振り返ってみたい。

第1節

今年も飾れず

？年以來開幕戦で勝ち星を挙げない駒大の開幕戦相手は、近年着実に力をつけ1部昇格を果たした流経大。昨年不動の守護神だった牧野の直前の怪我により急遽GKには蒲原を起用することに。昨年から課題の「立ち上がり15分の失点」を許してしまうと、立て続けにもう1失点してしまう。後半ルーキーの八角、小野里を投入し一度は同点に追いがゴール前からの混戦から流経大岡本に決められ万事休す。今年も開幕戦を白星で飾ることは出来なかった。



第2～5節

1年生の台頭、首位浮上

開幕戦後、エース赤嶺、原のハットトリックやルーキーの小林竜、小野里、塚本、八角、東平などの活躍により調子を取り戻した駒大は首位に躍り出る。



● 3-4 流経大

無傷の4連勝

戦を振り返る～

優勝の望みつなく執念の引き分け

第11節



後期取りこぼしもなく勝ち進んできた駒大は、筑波大、国士大と善戦を繰り広げ、見違えるような強さを発揮してきた中大と対戦。

「中大はいまや全く違うチームになっている」と秋田監督が言うように、好調の中大に駒大も飲み込まれてしまう。

中大はサイドを広く使い巧みに試合を操り前半36分、後半56、57分と3点差をつけて試合を決定付ける。まったく突破口の見えない敗戦濃厚の試合にうつむく選手の姿が見られた。

しかし、69分の中嶋のゴールを皮切りに選手たちのムードも高まり全員攻撃で中大ゴールに襲い掛かる。執念が実を結んだのはロスタイム、中後のクロスボールに巻が頭で反らし赤嶺が決める。直後相手選手が1人退場となり優位に立った駒大は、終了間際までも中後、巻とつなぎ最後は中嶋が押し込む。そして試合終了。11節にして初めて駒大らしいサッカーが見れた残り20分となった。しかし試合後選手たちに喜びの表情は無かった。「最初から終盤のような戦いが出来ていれば…」と筑城が語るとおり、良くも悪くもあった試合となった。

▲ 3-3 中大

第7節

前期3位で折り返す



勝って首位ターン。選手たちの頭の中でそんなシナリオは描かれていたのではないだろうか。

この試合、指揮官は筑波大の攻撃の起点を抑えるべく公式戦初出場の石井を右MFで起用。

前半小林亮のゴールで先制するも2分後には追いつかれるという悪い流れ。

後半に入り50、53分と筑波大にあっさりゴールを決められ2点差。その後東平、小林竜を投入し活路を見出そうとするが、反撃なく、前期を3位で終える。

● 0-1 国士大

● 1-3 筑波大

第6節

攻撃噛み合わず首位陥落



開始早々上場の立ち上がりを見せるが、国士大のキーマン清水翻弄される場面が目立ち始める。

攻撃を立て直したい駒大だがここまで7得点と爆発していた原がU-19代表選出により欠場。それが響いたのかチャンスを生かせない。

後半、怪我から復帰の関を投入するもゴールは遠く。逆にカウンター主体の攻撃を見せていた国士大に終了10分前に先制点を譲讓してしまう。ようやく目を覚ます時すでに遅し、首位陥落…